

## 没理想論争の論理(二)

橋 本 佳 代 子

## 二、第二期

明治二十四年九月、鷗外の「逍遙子の新作十二番中既廢四番合評、梅花詞集評反碎神子」<sup>(注3)</sup>が発表された直後、逍遙は「シェークスピア脚本評註緒言」<sup>(注4)</sup>と「我ふあらずして汝にあり」<sup>(注5)</sup>の二編を矢継ぎ早に発表した。これ以後の両者の論文発表のペースは、今までと比すこともできない程上った。これら二編は元を正せば「文界」<sup>(注6)</sup>底知らずの湖」にまで遡ることができ、当時の『早稻田文學』発行の根本的姿勢とでも言うべきものを鷗外めがけてぶつけたものである。ここで逍遙は、「造化の本軀は無心なるべし、さてシェークスピアの傑作は頗る此造化に似たり」とし、「彼の作、度量甚だ廣くして能く衆嗜好を容るゝと猶自然の風光の萬人を娛しましむるが如きに原くならん」として、シェークスピアの作品が広く世間に好まれる

ことを説いた。そして「シェークスピアの作は無心無情の鏡の如し其作には何人の面も映るなり明にいへば如何なる讀者の理想も其影を其中に見出すことを得るなり」と言つて、何故広く世間の人々に受け入れられるのかその原因を、シェークスピアの作品は全ての人々の理想を映すことのできる鏡であると定義することによって求めた。換言して、全ての人々の理想を受け入れるためには、その作品自体が持っている理想が高いのではないとし、「其理想を極めて強いて哲人の、如く高しといふは信がたしむしろ其没理想なるをたふべきなり」と述べた。つまり「シェークスピア脚本評註緒言」で逍遙は、万人の理想を一つ残らず受け入れられるからこそシェークスピアの作品は読み伝え、演じ続けられるのだと述べ、其作品自体に「理想」が「没」しているからこそ万人の理想を受け入れられると述べた。

白井吉見氏は、問題のこの部分に対する逍遙の発言の最大の弱点

を次のように解説されている。<sup>(注7)</sup>

こゝに注意しなければならないのは、『梓神子』で逍遙は、「批評家はなほ植物家の植物を評する如く、動物家の動物を評することく、理想を離れて其物を評すべし」という「没理想の評」を主張したのに、『マクベス評釋の緒言』では、シェークスピアの作品そのものが没理想だと言っていることである。没理想は前者では批評の態度を意味し、後者では作品の特質を意味している。

確かにこの「シェークスピア脚本評註緒言」でもその点は曖昧である。論の初めは「シェークスピアの作は無心無情の鏡（後略）」と言って、シェークスピアの作品を論題にしている。しかし同論の後半では「若しシェークスピアを稱美せんとならば其人間の性情を活動せしむる技倆を賞するは固より可かるべく（中略）むしろ其没理想なるをたゞふべきなり」と言って、厳密にみればシェークスピア自身が没理想であるかのように述べている。

このような不安定な論は他にも見ることができる。

シェークスピアと雖も若し散文にて悲劇を綴らば、悉くいへば小説の跡にて綴りしならば幾段か値段を下せしなるべし其叙事の中におのが理想のあらはるゝことを避けがたかるべきが故あり

逍遙はこの部分で「小説」とシェークスピアの書く「ドラマ」とを区分しているが、それは「小説三派」<sup>(注8)</sup>の中で「第三派（即ち人間派）」は最狭き意義にていふドラマの結構なり」とする部分と矛盾す

る。果して「ドラマ」が意味するところは今でいうところの「戯曲」であるのか否か。もっと広義であるのならそれは具体的にどういふものであるかなどの点が明確でない。このような多くの曖昧な点を鵬外に利用され、反論されたのである。

鵬外の反駁は、その年の暮すぐさま発表された。「早稲田文學の没理想」<sup>(注9)</sup>がそれである。

この論の初めで鵬外は、常の通りまず逍遙の論の要約を行う。ここで鵬外は逍遙が「シェークスピア脚本評註緒言」「我ふあらずして汝にあり」という順で発表したにもかかわらず、逆の順で要約に取り組んだ。つまりまず「コンモン、センス」<sup>(注10)</sup>について触れた後、シェークスピアについての逍遙の發言をまとめたのである。逍遙が「我ふあらずして汝にあり」の論で、シェークスピアより離れ「早稲田文學」発刊の義を正そうとしたことを全く無視し、冒頭の一言語しか取り上げないという鵬外の態度は論理的ではない。

逍遙の論を引用しまとめた後鵬外は、その逍遙の論に対する当時の文壇の反応を示し、七名の意見を紹介した。このような論の展開方法は、自己の読解力と広角的視野を誇示するための効果的手段と言える。かつ、逍遙の表面的な言葉を取らえて論破しようとする場合も適した方法だと言える。逍遙の論が何故そのようになったのか。又果してどのような真意を持っていたのか再び顧みる余裕を与えないためである。

そして、本論に入る。

ここに鳥有先生といふ談理家ありけり。

鵬外は突然、初頭から「鳥有先生」を登場させる。その先生についての説明は、「理を談するまゝとを旨とする 一大文學雜誌を發行せむとれもへども未だ果さず。」とあるだけで、何ら具体的経歴には触れない。鵬外が新たに創造した人物なのか、鵬外自身なのか、実在する人物の偽名なのか皆目明確にされない。しかし一つだけ明らかなのは、逍遙に対立し矢表に立つべき人物として、鳥有先生が登場したことである。

逍遙子この頃記實家となりて時文評論を作る。時文評論とは早稻田文學の一欄にして、現實を記するを旨とするものなり。

と鵬外はこの論の冒頭で逍遙を定義した。この定義と真向から反するものとして鳥有先生の定義がなされた。そして、

逍遙子が記實の文を読むには、大歸納力を具へざるべからず。鳥有先生が談理の言を聞くには、當りまへの理解力を備ふるのみにて足れり。

として、鵬外自身と鳥有先生との間に少し距離を置いた。この両者間の距離は縮りこそすれ、以後決してなくなりはない。ここに自分分は危険の及ばない一段階上位にあり、鳥有先生を意志するままに操っていかうとする鵬外の姿勢を見ることが出来る。

鳥有先生登場の後、全てその先生の發言を鵬外がそのまま書き記すという論法をとった。その態度は、「鳥有先生逍遙子が常識を貴むと聞きて、これを難じてはいはく。(中略)あらざるべし」とといったように、孔子の言葉を弟子が写しとうとうとする態度にも匹敵するものであった。鳥有先生という人物の実体が明確でない時点で

あって、このように論を展開するということは、正当ではないと同時に、論敵に懸念を抱かせ二の足を踏ませるであろうと、鵬外も承知していたに違いない。

鵬外はまず手始めに「常識」を取り上げた。「常識」も確かに政治家や経済家にとっては善いものである。しかし、

常識は基督を生ぜず、常見は釋迦を成さず、「コンモン、センス」の間には一個の大詩人を着くべきところだにあらざるべしと。

と述べて、常識を尊ぶ所に大詩人は生まれないとし無価値なものとして問題にできなかった。だがこの論では全くその理由が明らかにされていない。「キリストや釈迦は常識から生まれない。だから大詩人も生まれえない。」これでは全く論として成立しない。キリストや釈迦などの宗教の本質にかかわる人物と、大詩人とその両者のどこに共通項があるのか明記されていないからである。ただ感覚的に、常識を破る偉人という点を強調しても、それでは論にならない。

次に鵬外は没理想について反駁するが、まずその理想に関する部分を追っていく。

世界はひとり實あるのみならず、また想のみち／＼たるあり。逍遙子は没理想界(意志界)を見て理性界を見ず。意識界を見て無意識界を見ず。

と、今まで逍遙が使いもしなかった非常に抽象的な哲学的専門用語を用いて、逍遙を頭ごなしに批難することからそれは始る。鵬外は、実世界(現実界、経験界)しか問題にしないで理念の満ちた無意

識界を見ていないところに、逍遙の根本的誤りがあるとした。そしてその反論を説くべく鳥有先生が登場する。

鳥有先生既に理性界を觀、無意識界を觀て、美の理想 (Idee) ありといひ、又それに適へる極致 (Ideal) ありといへり。

とし、實際の感性としては

この聲、ふの色をまことに美なりとは、耳ありて能く聞くために感ずるにあらず、目ありて能く視るために感ずるにあらず。先天の理想ハよの時暗中より躍り出で、此聲美あり、この色美なりと叫ぶあり。これ感納<sup>レ</sup>性<sup>ノ</sup>上の理想ハあらずや。

のように定義した。つまり同じ一つの花を見ても人それぞれによってそれは悲しくも見えめでたくも見えるが、その花の色彩が美であると感ずるのは誰しもが同じである。そこに人々等しく持つ「先天の理想」が存在するとした。

鵬外の論を読む側としては、まず逍遙の論の解説をされた後で理性界を見落した逍遙の側に根本的誤りがあると決めつけられる。その直後にこの理想論の展開であるから、殆ど逍遙の論と照らし合わせ検討する余裕はない。次々と鵬外の論調に巻き込まれていく。

しかし、逍遙のいう「理想」とここで鵬外の言う「先天の理想」とでは、既にこの最初の段階において大きく違っている。

逍遙は「シェークスピア脚本評註緒言」の中で「彼が作は讀者の心々にて如何やうにも解釋せらるゝことの酷だ造化に肖たるをいふなり」と述べ、逍遙の論点はあくまでもここにあった。そして後に換言して解説を加えるときに「彼が傑作は殆ど萬般の理想をも容

れて餘あるに似たり是最も造化の本性に似たる所なり」と述べた。シェークスピアの作品が何故偉大であるのかという原因を、多くの個人の「理想」を許容することができると点に求めた。この場合の「理想」と、鵬外のいう唯一無二の「先天の理想」とでは同じ字であつても全く意味は異なる。逍遙の場合は、各人間それぞれの持つ想像力を持つてして生れた「理想」であるのに対して、鵬外のそれは、哲学上形而論上での「美」なら「美」の根元となるべき究極的な唯一のものとしての「理想」である。そしてこれ以前に、意識界と無意識界を持ち出して鵬外が逍遙を攻めたことが既に、逍遙の言うところの論点と噛み合っていないのである。

岡崎氏も同様に、<sup>注五</sup>

逍遙が「没理想」の語を用ゐる始めた以上、(この語を逍遙は既に「梓神子」の中で用ゐて居り、また逍遙の言によると、早くから同人の間で用ゐてゐたといふ) その理想の意味は逍遙に従つて考へるべきであるにも拘らず、鵬外は勝手に自己の用法に従つて戦いを開いたのであるから、この喰ひ違ひは鵬外の責に歸すべきものかも知れない。

と言つて、責任を鵬外に求めた。まさしくそうなのであつて、それは後から反駁をしたにもかかわらず逍遙の論点に眞の理解を示さず、自分の考えに固着しそれを振り回す手掛りとした鵬外の方に責任がある。

「先天の理想」の存在を述べた鵬外は次に、されどモツアルトはみづから美しく強き夢の裡よる其調を得たりといへり。こは



畫工の上にも詩人の上にもあるとにて、所謂神來<sup>シスビラチタリ</sup>即是なり。眞の美術家の制作は無意識の邊より來る。これ製作性の上の理想にあらずや。

と述べて、如何なる方面の作家が如何なる種類の作品を製作していく場合でも、理想がその製作の「裡」にあるとした。鵬外はここで、その作品の中に「理想」が存在しているか否か、没しているか否かについて論じたのではなく、製作時における作家の觀念のあり方やあるべき位置について論じたのである。この部分においても鵬外は逍遙の論を曲解した。唐木氏が、「嚴密な意味では論争になつてゐないといつてよ」く、「その上、兩者の論點が食ひ違つてゐて、そのために應酬毎に論點が高まつてゆくといふことがない。」<sup>(注12)</sup>とされたその原因は、鵬外の最初からのこのような態度に求めることができる。逍遙の論を受け付けず排斥しようとした鵬外は、自己の論の優位さを誇るため手段を選ばなかつたのである。

次に鵬外は、

若し没理想を説く人のいへるが如く、言葉のうちに在るのが理想のあらはれざる戯曲に長ずるためにシェークスピア大なり、たのが理想のあらはるゝ叙情詩若しくは小説に長ずるためにバイロン、スキフト小なりといハゞ、これシェークスピアとバイロンとスキフトとたまゞ其詩體を殊にせしために大小の別生じたるのみふて、その本來の才分境地にハ大小なかるべし。

と述べて逍遙を論難した。鵬外の反論する論點は確かに鋭い部分を指摘し当を得ている。しかしここで注意をしなければならぬのは、

は、鵬外が前提として持ち出した逍遙の論の部分である。鵬外は、「理想の現れにくい戯曲を作るのが得意であるためにシェークスピアが偉大であり、理想の現れやすい叙情詩や小説を書くのが得意であるためにバイロン、スキフトなどは劣る。」と逍遙の論をまとめ、前提に掲げてこれに反論した。しかし實際逍遙の「シェークスピア脚本評註緒言」で、バイロン、スキフトの名が登場するのは次の部分のみである。

上は審美の見識に富みたる學者より下は一知半解の者までも彼の作をもてはやすは(中略)彼の作、度量甚だ廣くして能く衆嗜好を容るゝと猶自然の風光の萬人を娛しましむるが如きに原くならんバイロン、スキフトなどの作の或人に喜ばれて他の人に嫌はるゝとは大なる相違なり

階級の差も職種の差もなくシェークスピアの作品は万人に受け入れられる。何故なら彼の作品は自然と同じように度量が廣く、万人の好みを受け入れられるからであると、逍遙は規定した。そして万人に好まれるシェークスピアと違つて、バイロンやスキフトたちは各個人によつて好き嫌いがあるとしたのである。ここで逍遙は、たとえ有名な詩人であっても全ての人に好かれないう作家の例としてバイロン等の名を挙げた。唯それだけに過ぎない。しかし鵬外はバイロン、スキフトの両名を持ち出してくるに及んで、それ以上の意味を添加させた。理想の現れやすい叙情詩、小説が得意であるためにこれら兩者はシェークスピアより下位であると、鵬外は逍遙の論を大きく曲解した。

そしてこの曲解を行う前にその下準備もまた巧妙に行っている。この「早稲田文學の没理想」の前半で、鵬外が逍遙の論の概要を述べていることについては以前から触れているが、その部分ですでに鵬外は曲解を行うべく事前準備をしている。

シエ、クスピアがバイロン、スウィフトより大なるは、彼は理想なく、此ハおのが理想をあらはせばなり。「ドラマ」の小説より全きは、彼ハ理想なく、此は作者の理想を含みたれむなり。

この部分において鵬外は、シェークスピアとバイロン、スウィフトとを比較した上で、逍遙は決して行わなかった理想を持ち込んでゐる。又ドラマと小説の比較をその直後に連ねて後々自説を展開しやすいように謀っている。鵬外は逍遙の論を接ぎ合せ、新たに添加し、如何にも逍遙がそう論じたかのような文を新たに創造した。

このように逍遙の論を大きく曲解した上でそれを前提に持ち込んでいるため、たとえ鵬外の反駁する論が的を得たようであっても、それは全く成立し得ることはできない。

逍遙を巧みに批難した後鵬外は、作品の中に現われるべき「理想」について論じる。

唯其理想は抽象アブストラクトによりて生じ、模型に従ひてあらはるゝ古理想家の類想にあらざして、結象コンクレートして生じ、無意識の邊より躍り出づる個想なり。小天地想なり。

ここで初めて、鵬外の言わんとする「理想」が如何なる性質のものであるか述べられる。しかし「結象コンクレートして生じ無意識の邊より躍り出づる」だけでは、たいへん抽象的で捕えられない。理詰め立つ

た論を展開して、「理想」がないことはありえないと証明しようとしても、その核となるべき「理想」の概念が二行足らずの抽象的な語でしか解説されていないのでは、鵬外の立場すら明確でないことになる。この時点での逍遙との相違が両者の食い違いの出発点となり、鵬外のこの不明快さが論争を泥沼化させ、逍遙に論争を放棄させる大きな因子となった。

逍遙との論点の食い違いの原因についてみる。まず先に逍遙は、シェークスピアの作品が「没理想」であるため世人に受け入れられると規定したのであって、「理想」がないとは決して述べていない。それも、シェークスピアの作品の「理想」は度量が広く万人の「理想」を許容できる。それは作家個人の「理想」が前面に出ないためであるとし、このことを「没理想」と新たに逍遙が名付けたのである。「没理想」の持つ意味はこの時点で明らかである。世人の理想を許容できることと、没理想であることは互いに補う表裏の関係であるとした。それを鵬外は、逍遙の論じるところの「没理想」論について反駁するのではなく、「没理想」という表面的な名についてののみ反駁した。二人の「理想」に対する誤解のみがこの論争を引き伸したのではなく、鵬外がこの初めの反駁の論において示したこのような論点の食い違いと、逍遙の論に対する無理解さが、そうさせたのである。

そして鵬外は、そのような自分の論を押し進めるべく前回に論述したハルトマンの類想、個想、小天地想を上段に掲げる。

其理想は（中略）結象コンクレートして生じ、無意識の邊より躍り出づる

個想なり。小天地想なり。大詩人の神の如く、聖人の如く至人の如く我もはるゝは理想なきがためならず、その理想の個想なるためなり。

シェークスピアが偉大である原因を、彼の理想が個想であり小天地想であることに求めたのである。しかしここでいう個想、小天地想が何を意味しているのか把握できない。鴈外が前回の論文で類想、個想、小天地想を登場させたのは、逍遙の小説三派固有派、折衷派、人間派に対応するものとしてハルトマンの美の階級を取り上げたときであった。その美の階級である個想、小天地想と「理想」とが一致すると結論だけをここの鴈外は述べているが、肝心なその論拠が述べられていない。個想、小天地想の二階級と理想は全く一致するのか、あるいはそれら二階級に含有されてしまうのかなど三者間の関係は全く不明で、断定のみを押しつけている。論拠には全く触れられもしない。その後続く文には、反論を許す余裕すら与えず、無理押しをする態度が窺える。

太虚の無意識中より意識界に取り繼がれずして生れたる造化と、わなじ無意識中より作者（シエ、クスピヤ）の意識界を経て生れ出でし詩（戯曲）とが似たるに何の不思議あらむ。（中略）是を以てシエ、クスピヤが戯曲古今に獨歩す。

一つ一つ理を重ねて論を進めていると一般に受け取られてきた鴈外の論も、実は非常に飛躍があり、不明な点が多い。

そして逍遙の論を逆手に取って鴈外は、自論をまとめようとしている。

バイロン、スウィフトのともがら、たとひ多く戯曲を作りぬとも、シエ、クスピヤにわなじ境地には至らざるべく、近松も戯曲を作りけれども、あの客観相をあらはしたる中に類想に近きとあるれば、到底シエ、クスピヤには及ぶるべし。

逍遙もシェークスピアの作品が他の作家達を寄せ付けぬ程偉大であり、大詩人であることを述べた。この点について鴈外は賛成を唱えているが、しかしそこへ達するまでに鴈外は、類想に近い部分があるので近松らは、その現想が個想であり小天地想であるシェークスピアに及ばないとした。これは、類想、個想、小天地想と優劣をつけた美の階級を取り入れ、逍遙の論の中に添加したと言える。

またここでバイロン、スウィフトや近松達とシェークスピアを比較することは、逍遙が持ち出した人名を利用して鴈外が勝手に論じているものであって、逍遙の論点とは全く似て否なるものである。一見逍遙の論を踏まえているように見えるが事実はそうではない。

鴈外は最後に、大言壮語をして逍遙に論をぶつけている。

彼數百千家は小家數にして、ひとりシエ、クスピヤの大詩人たるは何故ぞ。（中略）叙情詩に長ずる大詩人、小説に長ずる大詩人は果して生ずべからざるか。（中略）没理想を説く人の戯曲を取りて叙事詩に取らざるは何故ぞ。おほよそ是等の間に答ふる人なき間は、シエ、クスピヤに理想なしとはいはず。理想なきを大詩人の本相なりとはいはずと、烏有先生は説けりぞ。

何故シェークスピア一人が偉大であるのかという疑問を、鴈外は

真先に放った。しかしたいへんな愚問である。何故なら逍遙の「シエークスピヤ脚本評註緒言」の中で中心となった論が、この何故シエークスピヤが偉大であるかその原因についてであったからである。そしてその原因を逍遙は「没理想」に求めた。この鷗外の発言から考えても、鷗外が逍遙の論に反駁しているようでありながら、結局は一人で空回りしていたことが理解できる。またシエークスピヤに理想がないとは言わせないと論批したが、しかし逍遙は「没理想」とは述べたが、「理想」が「ない」とは述べていない。これは鷗外が気負い過ぎてミスを犯し一人相撲をやったと言うより、新知識を誇示するため逍遙の揚げ足を取ったと言えよう。鷗外が意図して逍遙の論を曲解し、自説を振り回したのである。

「早稲田文學の没理想」が掲載された『志からみ草紙』第廿七號には、同じ山房論文其七附録として「其言を取らず」という短い論が付け加えられている。ここで鷗外は「早稲田文學の没理想」で窺えた高飛車でかたくな文調とは変転して、自己の固分を固守しながらも頭ごなしに逍遙を排斥するということはなくなった。

鷗外はこの論文中、初めは全く鳥有先生の名を出していない。

「われ」という主語を用いて逍遙の論に理解を示す。これは前掲の論と鮮やかな対照をなす。前掲の論では、その本論の冒頭となるところに「よこに鳥有先生といふ談理家ありけり。」と述べて、鳥有先生一点張りであり、最後には

われ山房はありて興來れむ文を論ず。この頃逍遙子が言を聞いて實を記すること功德を知り、また鳥有先生が言を聞いて理を

談ずることの利益を覺りぬ。(中略) われは且らく鳥有先生に代りて、山房に居て文を論ぜむ。

と述べて、初めて「われ」という鷗外自身の立場を示した。彼はここで「われは且く鳥有先生に代りて」と述べているが、全くの鳥有先生の同一人物として「われ」は存在しない。常に鳥有先生の言を絶対視的に用いながらも借りものであるという態度は崩さず、「われ」という鷗外自身は一步禍中より退いて冷静な立場を保っている。

「其言を取らず」の中での「われ」のあり方もこれと同様である。先程も触れたようにこの論文中の「われ」は、前掲の論の末尾で「われは且く鳥有先生に代りて」と述べたにもかかわらず、全く鳥有先生を肩代りした「われ」ではなく鷗外自身一人を表す。このことは順に論を追う内に次第に明らかになる。

主觀の情を卑みて、客觀の相を尊む。是に於て乎、今の叙事詩すくなき世にありてハ戯曲をして第一位に居らしめざることあたはざるべし。それを早稲田文學が没理想を説きて戯曲を嗜む所以とす。われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没主觀なればなり。

鷗外は逍遙の論の内容には批判を加えず、唯その語の表現が適当でないので「主觀」に改めよと述べた。つまり前掲の論文を通じて「理想」という言葉の持つ正確な意味を示し逍遙の使い方の誤りのみを指摘しようとしたに過ぎないと述べた。換言すれば、もし「没主觀」という語を初めから逍遙が用いていたなら、この鷗外の反駁

の論は存在しなかったことになりうる。

しかしここで重要な事は、逍遙がドラマを一位としたのは主観が現れにくく客観的であるからと鵬外は規定したが、果して逍遙がその通り述べたかという点である。逍遙は「おのが理想があらは」れにくいからドラマを一位としたのである。たいへんニュアンスの似た客観という語を持ち出しているが、逍遙は主観の情と客観の相に尊卑を置いたのではない。ましてドラマを客観の相だと規定したのでもなく、多数の人々の「衆理想」を受け入れやすいと論じたのである。鵬外はここで、新たに「われ」の立場を登場させ、一見たいへんな理解者のごとく逍遙の論を肯定し言葉の選択の誤りを指摘した。しかし逍遙の述べるところの「理想」の真の意味を理解していなかった。理解していないというよりは、逍遙の発言には頑なに理解を示そうとせず、その発言を利用し踏み台にしたといえる。又シェークスピアについては、次のように述べている。

シエ、クピヤは大詩人なり。その作の造化に似たるは、曲中の人物一々無意識界より生れいで、おの／＼の個想を具へたればなり。その作の自然に似たるは、作者の才、様に依りて胡廬を畫く世の類想家ふ立ち超えたりけれどもなり。早稲田文學はこれに縁りて、シエ、クスピヤを没理想なりとす。われは其意を取りて其言を取らず。没理想ハ没理想にあらずして、没類想なれむなり。

確かに逍遙はシェークスピアの作品は造化に似ていると述べた。しかしその登場人物が全て無意識界より生れたとか個想などとは述

べていない。「無意識」という語は、鵬外が「逍遙子の新作十二番中既廢四番合評、梅花詞集評及梓神子」の中で取り上げたハルトマンの無意識哲学の中の用語であって、それを逍遙の論の中に強引に入れ組み込んでしまったのである。「その意を取りて」の「意」は既に逍遙の述べるところの「意」ではなく、すっかり鵬外の「意」に変えられてしまった。これでは、論の内容をハルトマン哲学を借りた別のものに変えてしまった後、逍遙の言葉はハルトマンの言葉と違っているので改めよと述べていることになり、主客転倒している。これでは全く論法として支離滅裂である。

同じように、「没理想」を「没挿評」「没成心」と語を置き変えてはいるが、結局は言葉の表現の差を持って遊んでいるにしか過ぎず、逍遙の「没理想」論自体を論じるには及んでいない。

最後に鵬外は「われ」の述べた事を総轄する。

われは早稲田文學と共に戯曲を嗜み、(中略)早稲田文學と共に悟を貴む。然れどもわれは早稲田文學と共に没理想を説かず。鳥有先生既に没理想を「主義」として辨じたれど、われは唯柵草紙の没理想といふ語を取らざる所以を言ふ。

「其言を取らず」では、この末尾の部分で初めて鳥有先生の名が出てくる。そしてここでははっきりと鳥有先生と「われ」との立場が区別されており、「われ」こと鵬外が代表する「柵草紙」が何故「没理想」という語に賛成を示さないかについて「われ」は申し立てたと、述べた。「われ」は明らかに鳥有先生とは異り、しかも「われ」は鳥有先生より下位に存在するのではなく、対等かもしく

はより以上の位置に存在するのである。このような鳥有先生と「われ」との関係は、「早稲田文學の没理想」で初めて鳥有先生が登場した時と全く異っている。例えば、「鳥有先生は逍遙子が常識を貴むと聞きて、これを難じてはいく。」や「鳥有先生はまた逍遙子が没理想の論を駁してはいく。」等のように鵬外や逍遙と同時代、同知識を有する人物として登場している。そして後半になるとその名はすっかり姿を消す。どこまでが鳥有先生の言葉で、どこからが鵬外の考えであるのか明快でない。

ここに鳥有先生を登場させた鵬外の態度の不徹底さと、その言を意志のままに操り論敵を翻弄するために明らかに利用するにしか過ぎなかったという鵬外の心理が窺える。

鵬外は「早稲田文學の没理想」「其言を取らず」の二篇を通して逍遙の「シェークスピア脚本評註緒言」の論点を認識していたにもかかわらずあえてそれから離れ、語の用法や語義など表面的二次的な問題についてのみ鳥有先生を登場させて反駁した。二人が論戦を繰り返しても論の発展を見る訳はない。確かに論争を行う場合その基盤となるべき語については共通のものを持つのがその前提となるが、終始そのことだけに終ってしまっただけのなら、論は出発点より移動していないことになる。最初の鵬外の反駁から既に末梢部分が取り上げられ、この論争は終始末梢部分に徹したのである。逍遙の言わんとした「何故シェークスピアの作品が偉大であるのか」という根本的内容的論まで深く掘り下げられることはなかった。そしてその原因となったのは、幾度も触れているように鵬外の逍遙に臨んだ

態度にあったのである。

#### 注

- 1、引用文中の傍点、傍線は全て省略した。
- 2、鵬外、逍遙の論文名の下に、掲載された号数が記されているものがあつたが、全て省略した。
- 3、無署名。『志からみ草紙』第24号明24・9・25「山房論文其一」として掲載。
- 4、『早稲田文學』第1号明24・10・20「沙翁評註」として掲載。
- 5、無署名。『早稲田文學』第3号明24・11・15「時文評論」として掲載。
- 6、無署名。『明治文學全集16坪内逍遙集』昭30・11・1河出書房
- 7、『逍遙論争——近代文學論争(二)——』『文學界』37新年特別号昭29・1
- 8、『現代文學大系1明治時代』昭30・11・1河出書房
- 9、無署名。『志からみ草紙』第27号明24・12・25「山房論文其七」として掲載。
- 10、『常識コンモンセンス無き小理想家の多き程厄介あるものは無し(後略)』という初頭の文を受けて鵬外は、「常識、常見の何物なるかは、よくも知らず、逍遙子はただ「コンモン、センス」といふ一英語を示しミのみなればなり。」と反論した。
- 11、『鵬外と逍遙との論戦』岡崎義恵『森鵬外研究』吉田精一編昭35・3・30筑摩書房

12、「若き森鷗外」『唐木順三全集』昭42・7・25筑摩書房 発表されたのは、昭和二十三年十二月、好學社發行の季刊誌『文芸評論』第一号「鷗外特輯」で、「論争になつてゐない」という否定的な意見を初めて發表したものであつた。以後多数に及びこの部分が引用された画期的な論文である。

(本学54年度卒業生)